

No.2705

南ボルネオのダヤク人による「宗教」(カハリンガン)の構築  
—マイノリティの国民統合—

立教大学アジア地域研究所 特別研究員  
相澤 里沙

本年度の活動は、①植民地期南ボルネオのダヤク人の植民地期南ボルネオのダヤク人の信念体系に関する資料の分析と論文の執筆、②バーゼル伝道会(スイス)のアーカイブでの資料収集、③カハリンガンとヒンドゥーの統合に関する資料の分析と学会発表の三点にまとめられる。具体的には以下の通りである。

①南ボルネオのダヤク人は、19世紀半ばより始まるキリスト教伝道や20世紀初頭の民族主義運動とインドネシアの独立などに影響を受け、自らのエスニシティとそれと密接に関連した「宗教」を形成した。そこで19世紀から20世紀前半のダヤク人の信念体系を民族誌の精読を通して検討し、論文にまとめた。特に注目したのは、彼らの信念体系の特徴をなす死生観である。分析の結果、ダヤク人の死生観は共同体やそれが有する規則と密接な関係があることがわかった。

②バーゼル伝道会の宣教師が記した年次報告から、ダヤク人の民族意識の形成と「宗教」について検討した。年次報告の分析の結果、元キリスト教徒であったハウスマン・バブという人物がダヤクの教育や利権の保護に尽力し、ダヤク人の民族意識の形成に重要な役割を果たしたことがわかった。また、ダヤク人はイスラーム同盟をモデルにしたダヤク同盟やバンジャル人の組織に対してパカット・ダヤクを組織するなど、キリスト教のみならず周辺民族との関係から、「ダヤクであること」を意識するようになったことが明らかになった。

③以上のように植民地下で強まったダヤクの民族意識は、独立後宗教と結びついて、「カハリンガン」を公認化させるに至った。日本軍政期に海軍のもとで働き、独立後は中央カリマンタン州知事を務めたチリク・リウトの残したダヤクの宗教や文化に関する報告書や書籍、カハリンガンとヒンドゥーとの統合において大きな役割を果たしたカハリンガン・ヒンドゥー教大評議会や宗教省の発行した文書、近年のヒンドゥーからの独立に関する文書や新聞記事、インタビューの分析を通し、ダヤク人が何を「宗教」と捉えてきたのかと、「宗教」と「文化」あるいは「慣習」の関係を考察した。